

『ホントのキレイを生活から追求する』

金子知香

1,741 文字

あらすじ

生きる事を活かすと書いて生活という漢字がある。日常生活のキレイを保つこと、そこに日本の美の根底があるのでないか。化粧や身なりがキレイとか、景色がキレイとか誰が見てもわかりやすい「キレイ」より生活の中のキレイをしたためることで、生きる根本の美を見つめてみたい。

日常生活を営む時、衣食住は毎日欠かすことが出来ない。まず、「衣」から述べると、怪我をしたり出血をした時、衣類に血がついてしまう事がある。今では高性能な洗剤も出回っているが、血の汚れは水につけて置き、もみ洗いする事で綺麗に落ちる。勿論、洗剤を使えば落ちるのは早いですが、昔は時間をかけ、手でもみ洗いしていたものである。また、着物が主流だった時代から、季節の変わり目だけでなく甲羅干しをしたり、長く着られるようにものを大切に作る習慣は今も尚日本にある。一方、安価な衣料品が出回り、着倒しては捨てるという習慣を通例としている者も今では少なくないが、この慣習だけで生活を営むとなると自然を大切にするという心の綺麗さが失われかねない。つまり人間はゴミをさらに増やすことになってしまう。

「食」に関しても同様で、昔は食材が少なかつただけでなく、物々交換などお金では買えない食材を大切にしていた。特に戦時中など、食べ物がとても少なく分け合わなければ得られなかったほど限られていた時代は食材を大切にしていた。同時に、命をいただくという意味で、食べられる箇所は例えば大根の葉であっても漬物やみそ汁の具にして余すところなく食べ、命を粗末にしないという美徳があった。今では飽食の時代となり、グルメ雑誌も出回り、情報を得て美味しいものを外で食べる事が多い人も増えたが、生活を大事にするという事は、血となり肉となる食料、そしてそれを食べる自分と自分の生活を大切にしてきた食文化における命の尊さを重んじる考え方が基本にあると思う。カップ麺やインスタント食品、レトルト食品、外食ですべての食を満たすのではなく、生きている人生の中に各々の生活における自分の位置づけ、「美学」があってこそ身も心もキレイに保たれるという綺麗さがあると考えます。

「食材」を調理すれば台所もおのずと汚れる。時にうっかり鍋を焦がしてしまう事もあるだろう。ゲキオチというスポンジや落ちやすい洗剤はいくらでもあるが、昔から使い込んできた鍋を焦がしてしまった時、鍋に重曹を入れ、水でコトコト煮込んで落とすという生活の知恵を知っている人は今どれくらいいるだろうか。どれだけの人が実際に行っているだろうか。カレーを食べた後のお皿をすぐに洗う事を忘れてしまった時、太陽光にかざしておくだけで黄色くなったカレーのシミのついたお皿のシミが取れるという事をどれだけの人が知っているだろうか。どれだけの人が行っているだろうか。

最後に「住」に関して言及する。一見便利なものを使い、住まいの掃除も電動掃除機に任せ、雑巾がけをすることなどなく、洗濯も全自動洗濯機に任せ、天井の高い所が汚れてもハタキをかけることも、ハタキを買う事もなく、いや、ハタキの存在さえ知らず、着古した衣類でハタキをつくるというような発想さえなく、便利で美味しい生活を続けていくとしたら、もしも再び震災のような出来事が自身に降りかかった時、輸入に頼りがちな日本に対して輸入が止まった時、日本人は生きて行けるのだろうか。

改めて生活におけるキレイを見直し、もしもの時を考えながらつましく生活の知恵と技を駆使しながら、しかし育児や仕事で多忙な時期は便利なものを開発してくれた人間の知恵が生み出した便利なものに手伝ってもらおうという、あくまで人間の生活が生み

出した便利な文明を利用するのは生活の1部であり全部ではないという前提があったなら、これからを生きる子供たちにも生活の知恵が伝承され、綺麗な生活が保たれ、多くの人の末永い幸せが続くのではないかと私は考える。どんなに便利なものが開発されても高齢化に突入した介護の分野において動けない人の体をふいたり、オムツを交換したり、食事を相手のペースで口に運びながら食が進むように会話を成立させるという気配りある行動は機械では代わる事のできない行為である。丁寧に暮らす。便利なものに頼りすぎず時間がかかってもあえて時間をかけて生活をいつくしみながら自分と自分を取り巻くまわりの生活をキレイにする。この行いを続けた者にこそ、人を助けようと思える思いやりある助け合いの綺麗な気持ちと真心が生まれるのではないかと考える。キレイは心から、そう心がけたいと思いながら私は生きている。